

---

# 侍狐と少女狐

天武

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

侍狐と少女狐

### 【Nコード】

N0805Y

### 【作者名】

天武

### 【あらすじ】

二人の狐が綴る物語……

## 第一卷

side 玉藻

後閑末期。 朝廷の腐敗により人心は荒れ果て、災害に人々は不安に駆られた。

民が生きる希望を失ったその瞬間

黄巾党と呼ばれる組織が現れ、それに民は希望を感じ、黄巾党へ着いた。

それまでならまだ良かったであろう。

だが、一部の過激派とも言える者が賊へ成り下がり罪無き村の住民を殺し、誘拐し、食料を奪い去った。

これにより黄巾党は危険極まりない組織として、朝廷から討伐命令が下される。

それは各地に存在する群雄に伝わり、群雄達は行動を起こした。

「黄巾党結成当時はただ朝廷を打倒し、平和な世を築く為に……」

「だが、長角という者が現れてから組織は墮落した」

「彼女に洗脳され、同志達は皆変わり果てた。

救うべき者達から強奪し、それを私利私欲の為に使い続けた」

元黄巾党の一人であった男、感興はそう言って刀を携える。

その眼はまさしく復讐者の眼であった。

「行きましよう玉藻殿。 彼女を倒し、共にこの国を平和を作りましようぞ」

そう言つて老兵はただ一人、黄巾党達の本体へ突撃を掛ける。拙はその後をただゆっくりと追いかけた。

襲いかかる賊に無慈悲な一撃を与えつつ、ゆったりと老兵の後ろを黄巾党の本陣を目指した。

「なぜ長角様の歌をお聞きにならない？ 聞けば救われるというのに！」

「救われないから、こうして肅清に出る者がいるのだ」

そう吠える文官らしき男を一太刀で叩き斬り、それに逆上した賊達をさらに斬り捨てる。

返り血が、服を、顔を、剣を汚すが拙にはそんな事どうでもよかった。

いや、どうでも良いというのは少し違つかもしれない。

私の主とも言える少女が、戦場で汚れた拙をいつも戒めていたな。

「玉藻は強いね。 こんなに大きくて、たくましくて、いつも私の事を守ってくれる」

少女の言葉は、傷つき疲れ果てた拙には安息に等しかった。

孤独で世界の様々な戦争に一介の兵士として乱入し、常に己を傷つけた日々。

そんな当ても無い旅の途中で拙は少女と出会った。

雪降る森の中で出会った時、彼女はポロポロに傷ついていた。服も、体も。その可愛らしい姿とは無縁であるはず傷が少女の体に至る所にあつた。

少女は雪の中、一人で靴も履かぬまま歩きだす。拙はそれを黙って見過ごせなかった。

私は少女を抱え上げると、顔を少女に向ける。

「私と旅をせぬか？ 一人より二人のほうが面白いだろ？」

少女は最初の内は驚いて声も上げなかったが、しばらくして口を開いてくれた。

私と一緒に旅がしたいの？ いいよ。一緒に行こう

少女との旅はけして楽な道のみではなかった。

険しい山を越え、海を越え、戦争に巻き込まれたりした。

少女に迫る脅威を拙は無意識の内に身を挺して庇い、打ち破った。

一つの脅威を打ち破る度に、拙に少女から賛美が送られた。

やったね。 玉藻！

笑顔で発せられたその言葉に、拙は今までに感じた事の無い幸福感に満たされた。

この少女は命を掛けて守り通す価値があると、拙はこの瞬間から感じ始めた。

そして今、少女は拙の後ろで私の戦いを見守っていた。

ポロポロだった服は白いワンピースに変わり、痛々しかったその傷

は癒えたも当然だった。

「うおおッ!!」

陣形を組み、突撃する賊達を一閃で薙ぎ払い、その肉を引き裂いた。賊達の血が剣に付着し、匂いが染み込む。

「なんであいつの剣はあんな刃こぼれしてんに斬れるんだよ!？」

確かに。この剣は孤独に戦い抜いていた頃から、なまくらに等しいほど損傷していた。

だが、例えなまくらになろうとこの剣は拙の意志に答えてくれた。

少女を守りたい。その意思を、この剣は摘んでくれる。

だから、拙は少女の脅威を、立ち塞がる者を悉く粉碎していった。

side 周榆

あの戦士……。戦場に娘を連れてくるとは何考えているのだ？

困か？ それとも驕りか？ どちらにしてもあまりいい感じはしなかった。

だが、実力はまさしく本物であった。

こうしている間も、何十という賊を一太刀で薙ぎ払い、数千に及ぶ肉塊を作り出した。

人としてなら嫌悪するが、戦士としてなら雪蓮は大喜びしそうだ。

まあ仲間にはしないだろうがな。

「冥琳。 あいつなんだけど……」

やはり気づいたか。 私は戦場を見渡しつつ、友の話を聞く。すると、意外な言葉が彼女から放たれた。

「彼、私達の仲間になれば心強くない？」

「少なくともワシは反対だな。 あんな阿呆を引き入れるのは」

これより少し前に天の御使いが率いる義勇軍を見たが、まさしくそれに似ていた。

戦場で美女達とイチャイチャしながら戦うあの男に……。

姿形は違えど、中身は同じ。 朝廷の官共と同じケダモノ。 討たれた敵にむしろ同情を感じるわ。

side 空孤

玉藻の攻撃に皆吹き飛ばす。 腕を飛ばされ、足をもがれ、血の海が

眼前に広がった。

だが、彼等は進軍を、迎撃を止めようとしなない。

なぜ？ なぜそこまで守りたいの？

この乱の原因である長角をなぜそこまで守りたいの？

「長角様こそ、この世に平和を与え下さる！ なぜお前らは理解できんのだ！？」

そう叫び、突撃を掛けた兵士の一人が玉藻に斬り飛ばされる。

平和を与えるならなぜ信者達を死なせる行為を行うのだろうか？  
敵は朝廷だけのはずだ。私達ではない。

「長角様の言う事は正しいのだ！ お前達はそれを理解できないのか！？」

罪の無い村人を襲って私利私欲の為に使う事に何の正しさがあるのだろうか？

長角も…… 黄巾党の人達も……

「賊も数が減ってきたな。……さて私達は帰るか」

「長角は？」

玉藻が剣を鞘に収め、私を肩に乗せどこかへ行こうとする。  
気になった私は質問をぶつける。

「私が出さなくとも長角は討伐されるであろう。」

自分を守るであろう信者はほとんど討ち取られ、その上にあの軍勢だ」

見れば確かにそうだ。

4万はいそうな程の軍勢に長角の信者は2千前後。  
さらには、武器を捨てて逃げ出す者まで現れ指揮系統は混乱していた。

「どこか行く当てはあるの？」

「そういえば、この先に都があったな。そこに立ち寄ろうではないか」

そう言つて私達は都へ向けて歩き始める。

それと同時に、少し後ろから女の子の叫び声と、何かが落ちる音が聞こえた様な気がした。

都に着いた私達を待っていたのは思いがけない物であつた。そこは空気がやけに重く、昼間だというのに辺りが暗く。何より人が笑つていなかった。

「旅人や、今すぐここから立ち去りなさい」

ふと振り向くと老人がこちらを睨み付けながら、こちらに歩み寄つてきた。

「この主、劉表は暴君として君臨しております  
それは自分の悪口を言うものは皆、牢屋に入れられ、処刑だ」

老人が言い終わると同時に、どこからか矢が飛んできて、老人の喉を貫いた。

老人は喉を抑え、苦しみ、喘いだ後そのまま動かなくなった。

「……ひどいね。 どうして殺すのかな？」

その瞬間、何かが倒れる音が響いた。

見るとマスクを被つた男達が皆急所を矢で射され、息を引き取つて

いた。

「……………いくぞ。 劉表とやらがいる城にの」

私は黙りながら、彼が目指す城をただ、ただ見つめた。  
。

## 第一卷（後書き）

Orz  
連載するはずが、短編で出してしまう誠に申し訳ありませんでした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0805y/>

---

侍狐と少女狐

2011年10月31日01時24分発行